

資 料

日本語表現力向上を目指して
——「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」での取り組み——

生 塩 睦 子*

はじめに

報告者のゼミは、「日本語表現能力の向上」を目的としている。相手にきちんと伝わる話ができ、相手に納得してもらえ文章が書けるようになるために、さまざまな「話す」こと、「書く」ことを行う。まず、課題をゼミで「話し」、それを各自が「文章化」する、その繰り返しを基本としている。

このゼミを志望してくる学生は、毎年、すべての面で多種多様、みんな独特な個性の持ち主である。肝心の「話す」ことに関しては、人前で話すことを抵抗なくできる学生は少数派で、大多数は話すことが苦手なことを自覚している。

このような彼らに対して、こちらが課題を出し、グループで、あるいは個人で「話す」ことを実践してもらおう。1年次生では、以前はグループ活動が出来たが、ここ2、3年、グループ活動で課題をやっていくのは出来にくくなっている。3年次生には、11月下旬から始まる最終課題以外は、グループで課題に取り組んでもらう。4年次生は、卒業論文を素材にするプレゼンテーションであるから、個人戦である。

出来が悪いとやり直しをしてもらうことも少なからず、話した後は文章化作業が待ち構えているので、課題が多すぎると当ゼミ教員に対する評価はあまりよろしくない。

本報告では、3・4年次生を対象とする「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」での取り組みを述べ、必要に応じて、1年次生対象の「入門ゼミ」での場合に言及する。

ゼミでの取り組みを述べる前に、ゼミ運営で心がけている点二つを述べる。

* 広島経済大学経済学部教授

一つは、学生一人ひとりをよく知り、学生個々に応じた対応をすることである。

これには、学生の名前をできるだけ早く覚えることから始まる。授業第1回に間に合うように、所属学生の名札を作っておき、毎授業ごとに自席に立ててもらおう。この名札は、授業者のためでもあり、ゼミ生のためでもある。授業者は、授業2回目にはゼミ生全員をだいたい覚えているが、ゼミ生の名前を確認できるので名札があると助かる。ゼミ生には、同じゼミの仲間を早く知ってもらいたいのだが、ゼミ生は特定のゼミ生と仲良くなることが多く、ゼミ生全員がお互いの名前を覚えるのは、だいたい前期末までかかる。

3年次ゼミ生は、このゼミに履修願いを出す際に面談を行っているので、当人の人間像を一応つかんでいる。授業開始後、ゼミ教室内での学生の受講態度、課題に対する取り組み方、提出物書き込み状況等から、学生の人柄や性向などがだんだん詳しくわかってくる。そこで、学生個々人に合う対応を考えるのである。

ゼミ生に口頭発表やレポート提出を求めるのだが、1回で済む場合もあるが、往々にしてやり直しを求める。どこまでできれば合格（その課題をやり終えたと認定）とするかは、厳密には一律にはならない。学生によって「注意受け入れ度」が違うので、どこまでこちらの指摘を受け入れてくれるかを見極めた上で、学生個々に応じて各課題合格を決めることになる。

もう一つは、表現意欲を喚起するような工夫を取り入れていることである。具体的には、必ず発言しなければならない仕組みのゼミ活動にすることである。

3年次のゼミでディベートを主活動とするのは、その時どうしても発言しなければならない状況に追い込むことができるからである。4年次の「卒業論文」プレゼンテーションでは、全員が発言しなければ、その時間のゼミは終わらないというルールを作っている。

また、学内の「図書紹介コンテスト」や「懸賞論文」に全ゼミ員が応募するように仕組んでいるのも、学生の表現意欲を高めるためである。と同時に、ゼミ担当教員の評価だけでなく、客観的な評価を受けることになり、幸いにも表彰される対象に入ることができた場合には、学生自身にとって大きな自信に繋がる。

なお、報告者は学生が発表するにはすべて録音することになっている。学生に緊張感を持って発表してもらうためと、発表内容の聞き漏らしを防ぐためである。学生の「相互批評」をまとめる際、録音を再生してもう一度学生の発表を聞きながら、学生の「相互評価」を整理して文章化し、次週に本人に手渡すことにしている。

以下、ゼミで行っている取り組みについて述べていく。

1. ゼミメート紹介

これから2年間、ともに学んでいくことになるゼミ仲間をお互いによく知ろう、という目的で行う。とかくマンネリになりがちな自己紹介を避けて、初めて出会ったゼミ友にインタビューし、その人の良い点を紹介するというものである。

ゼミ最初の時間、あるいは第2回の時間に行く。「演習Ⅰ」では最初の時間に行くが、「入門ゼミ」では、第1回でオリエンテーションを行うため、第2回に行くことが多い。

<手順>

- ① 二人一組になる。
- ② 相手をインタビューして、お互いの情報を得る。
- ③ インタビューのメモを元に、発表内容を考える。
- ④ 発表原稿を作る。
- ⑤ リハーサルする。
- ⑥ 発表する、評価する。

詳しくは、本学発行の『入門ゼミテキストⅠ・Ⅱ 広島経済大学での学び～可能性を広げる表現技法～』に述べたとおりである。

報告者の本年の「入門ゼミ」クラスでは、質問する側がごく簡単な問いかけで尋ねて回答する側が単語だけで答えるというペアが多く、発表本番では、ほとんどが1分以内という不活発さであった。しかし、ある「入門ゼミ」クラスでは、このテキストの方法を使って非常に盛り上がった、という報告を受けた。ゼミメンバーの気質にもよるが、ゼミ担当教員のコーディネート仕方が、この活動の出来不出来を左右する。

「演習Ⅰ」では、大学生活を2年間過ごしてきて、その学生なりの学びの姿勢が出来ているので、この「ゼミメート紹介」は楽しんでやってくれる。3年次生の場合、インタビュー時間を各5分にする。発表原稿は一応作ってもらうが、本番ではこの原稿に頼らないで発表できる学生も少なくない。全員1分台後半で発表でき、3分近くまで発表する学生もいる。聴く態度も身についてきているので、「相互評価票」(上記の『入門ゼミテキスト』P.30)の記入もきちんとできる。

2. 作品の朗読・暗唱

朗読になるか、暗唱になるかは、年度によって異なるが、近年はもっぱら暗唱発

- ④ 教員は次週のゼミまでに相互批評コメントを整理し、教員の評価・コメントを添えて記入したものを、本人に渡す。

本年度の「演習Ⅰ」履修生は、実によく聴いてくれ、率直に相互批評をしてくれる。思いやりに満ちたコメントを書いてくれる者もあり、この2年間のゼミ活動が実り多いものになりそうな気がしている。

3. お薦め本紹介

一昨年からこの活動を取り入れている。

以前は、「報告」（ゼミ員を4グループにして2課題を出し、2グループが同一課題に取り組み、どちらのグループの報告に説得力があるかを競う）を行っていた。

このお薦め本紹介は、日本語表現力育成の取り組みの一つとして、本学読書技術開発ワーキンググループが行っている「お薦め本紹介コンテスト」を、ゼミ活動の中に取り入れたものである。1年次生・3年次生・4年次生、いずれのゼミでも行う。4年次生だけは、「小説」類は含まない、という図書選定に制限を設けている。

<手順>

- ① 最初の授業時にこの課題の説明をし、発表順番を決める。
これまでで一番感銘を受けた本の内容紹介を、5分（3分未満の場合はやり直し）を限度に行う。その発表を聴いたゼミ生が自分も読んでみたいと思ってくれるようなスピーチをしてほしい、と伝えておく。
- ② 授業開始5回目から2名ずつ発表をしていく。1200字から1500字程度で発表原稿を用意してもらおう。聞き手は次ページの様式で相互批評をする。
相互批評用紙を回収し、3年次生の場合は、「わかった度」と「読みたくなった度」を、すぐ集計する。白板に各人の評価を、教員が読み上げてお世話番のゼミ生が各々の欄に人数を書き入れていく。集計が終了したら、発表者がその数字を見て、自分の発表に対してどのように受け止められているか、の感想を述べる。
- ③ 教員は、聞き手の相互批評コメント欄をまとめ、教員のコメントも記入して、次週、本人にまとめたものを渡す。
- ④ 発表者は、相互批評・教員のコメントを参考にして、お薦め本紹介文章の改良版を1000字以内にまとめ直し、教員に提出する。そして、全員、図書紹介コンテストに応募する。

この「お薦め本紹介」改良版の文章作成に当たっては、教員は一切手を加えない。

4. わかる説明

相手にわかってもらえる説明の訓練で、3年次生向けの課題である。

声だけで、どれだけ相手に事柄を正確に伝えることができるか、の訓練であるが、ゼミ生は、声だけで伝えることの難しさを痛感することになる。

<手順>

- ① 説明演習1回目。人前で話すときの基本を説明する。

聞き手によく伝わるような組み立てにすること。それには、はじめに「アウトライン」「柱立て」「結論」などを明示する。一つ一つの情報を伝える順序は、「主情報」「話の柱」を先に出し、「補助情報」「その内容の詳細」は後にする。

わかりにくい説明の例をもとに、どこの部分がわかりにくいかを考える。本年度は、前掲『広島経済大学での学び』の「自宅への道順を電話で説明する」(p.25)の例、Hさんのわかりにくい説明を使った。

- ② ゼミ員を4グループに分け、各々に課題を渡す。課題は、図形・道案内 図・家の間取りなど。どのように説明したら、聞き手に正しい図を書いてもらえるかを考え、次週、発表できる準備をしておくように伝える。
- ③ 説明演習2回目。各々のグループは課題の図を説明し、聴き手は説明されたとおりの図を描く。説明ルールは、一回限りであること、同一箇所を繰り返して説明してはいけないこと、この2点である。
- ④ 4グループの説明が終わると、教員が全グループの聴き取り図を回収し、説明担当グループに渡す。

各々のグループは、聴き手が描いた図を点検する。〔正しい図・正しい図に準ずるもの〕を4割以上得ることが出来たグループは、次週、次のステップに進む。

〔正しい図・正しい図に準ずるもの〕が4割未満の場合は、次週、説明のやり直しをすることになる。

各グループは、自分たちのグループが次のステップに移れるか、やり直しをするかを教員に報告する。

次のステップ「説明文伝達度の検討および改良説明文作成」は、次の4つを具備したものを作成する。

- i. 説明した文章全文を示す。
- ii. 「聴き取り図」の検討をする（全員の「聴き取り図」と「原図」を出し

て、説明がよく伝わらなかったところを点検する)。

iii. よく伝わらなかった点を分析・考察する。

iv. 改良説明文を作成する。

上記のものを資料としてゼミ員分の配付資料を用意し、次週、発表する。

- ⑤ 説明演習3回目。再度の説明に挑戦する(説明のやり直し)グループと、「説明文伝達度の検討および改良説明文作成」グループに分かれる。

先に、前者のグループの発表、説明をしてもらい、教員がその聴き取り図を回収し、説明担当グループに渡す。各説明担当グループは、聴き取り図を点検し、次のステップに移れるかどうかを教員に報告する。

その後、後者「説明文伝達度の検討および改良説明文作成」の発表をしてもらう。その発表に、他グループ員の納得が得られたら、そのグループの課題は終了となる。

- ⑥ 説明演習4回目。説明のやり直しグループの「説明文伝達度の検討および改良説明文作成」の発表。

この4グループに渡す4課題は難易度が異なっており、くじ引きで課題を受け取ってもらうことにしている。比較的易しい課題であれば1回でクリアできるが、不運にも難しい課題に当たると再々挑戦となる。本年度も、「マンション1区画の間取り」は再々挑戦となった。

相手に正しく情報を伝えるには、話の内容を聞き手によく伝わるような組み立てにする、聞いてすぐわかるような言葉を使う、聞き取りやすい発声・発音で、声の大きさ・速さを考えて話す、それらすべてが整ってはじめて相手に正しく伝わるのだ、ということ、学生たちは身をもって体験するのである。

5. ディベート

報告者は、平成5年度に「演習I」を受け持って以来、また、平成11年度に「入門ゼミ」を受け持って以来、一貫してディベートをゼミ活動の中に取り入れてきた。それは、大学生にディベートを通して得られる教育的効果が非常に大きいと信じているからである。その教育的効果とは以下の5点である。

- i. 客観的分析力が身に付く。
- ii. 論理的思考力が身に付く。
- iii. 発表能力が身に付く。
- iv. より良い聞き手になれる。
- v. 情報収集力が身に付く。

(魚住忠久著『ディベート学習の考え方・進め方』p.14)

1年次生の入門ゼミでは、ディベートは3年次生の演習Ⅰほど活発な活動にならない。しかし、よく「聴いて」、よく「理解して発言しなければならない」状況におかれることで、また、物事を肯定・否定、表・裏の両面から考えていかなければならない場が設けられることで、その学生なりの力を身につけていく活動であることには間違いない。

ディベート学習の流れは、以下のとおりである。

<手順：ディベートⅠ（前期に行うディベート）>

- ① ディベート／第1回・・・テキスト（前掲『広島経済大学での学び』（p.65-74）を配付し、ディベートについての説明をする。

まず、ディベートの進行とルールの理解。ディベートに必要なメンバーは、ディベーター（肯定側・否定側各1グループ）、司会者1名、計時係1名、審判（以上の役割に当たっていないゼミ員全員）である。ディベートの内容は、立論—論戦（反論・応答）—最終弁論の三つの部分からなる。

ゼミ員を4チーム（A・B・C・D）に分ける。

教員が論題を提示する。ゼミ員は各チームで相談のうえ論題を選択し、対戦するチームが決定する。

- ② ディベートⅠ／第2回・・・ゼミ員全員で対戦、全員で審判。

ディベートに慣れることを目的として、ゼミ員を2チームに分けて（例えば、A・Bグループ：C・Dグループ）、両者で対戦する。

本年度の論題は、「人と人が本当に理解しあうためには、手紙やメールで伝えるより実際に顔を合わせるほうが良い」で行った。

- ③ ディベートⅠ／第3回・・・対戦第一試合

ゼミ室を、次頁の図のようにセットし直してディベートを行う。

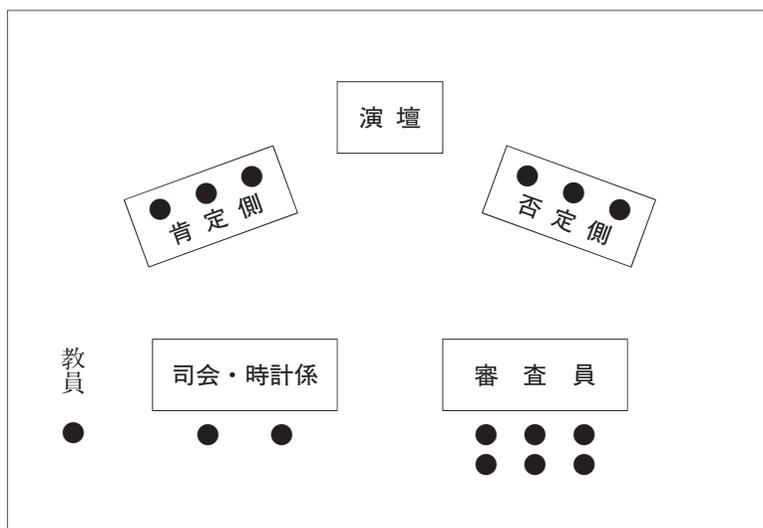
対戦しない2グループから各1名が出て、司会・計時係になる。役割に当たっていないゼミ員は審判員となる。

司会は、決められたマニュアルに従ってディベートを順次進める。ディベートⅠでは、立論5分・論戦各12分・最終弁論4分で行う。また、審判員の講評は求めない。

本年度第一試合の論題は、「患者がガンだとわかった場合、それを告知したほうが良い」であった。

- ④ ディベートⅠ／第4回・・・対戦第二試合

ディベートⅠ第一試合の要領で、第二試合を行う。



本年度第二試合の論題は、「屋外で場所柄をわきまえず座り込むことは良くない」であったが、否定側の立論が非常に難しいため、「座り込むことは良くないとは言い切れない」で行った。

⑤ ディベート学習のまとめ・・・改良立論の作成

ディベート二つの対戦が終了すると、学生各自に改良立論の提出を求める。これは、[立論—論戦—最終弁論]の流れを経験することによって、その論題についての考えが深まることから、当初の立論よりも説得力のある立論が期待できるからである。

後期に行うディベートⅡ・Ⅲは、論題を政策論題とし、各自2試合行う。論題の例を以下に挙げる。

- ・ 高等学校にも学校給食を導入すべきである。
- ・ ごみ回収を有料化すべきである。
- ・ テレビゲームに規制を設けるべきである。
- ・ 選挙の棄権に罰則を設けるべきである。
- ・ 死刑制度を廃止すべきである。
- ・ 消費税率を引き上げるべきである。

ディベートⅡ・Ⅲの準備段階では、図書館の演習室を利用する。

<手順：ディベートⅡ>

- ① ディベートⅡ／第1回・・・チームの再編成をして、提示された論題の中から、チームとしての論題を決定する。

ディベートⅠの準備(1)…情報収集をする(新聞・白書・インターネット他)。

ディベートのテーマに沿って、事実関係、これまでの論争の経緯などを調べ、どういう点が問題になっているかを理解する。

② ディベートⅡ／第2回

ディベートの準備(2)…立論を考える(チームとしての統一見解を組み立てる)。

立論を考える際には、できるだけ多くの論点を挙げ、いろいろな展開を探り、どの論点に重点を置くかを考えるように伝える。

③ ディベートⅡ／第3回 ……対戦第一試合

ゼミ教室において、ディベートⅠの要領で第一試合を行う。

このディベートⅡでは、対戦する両チームは必ず資料を用意しなければならない。論戦の時間は、各15分となる。そして、肯定側最終弁論の後に、各審判員に講評を述べてもらう。

⑤ ディベートⅡ／第4回 ……対戦第二試合

ディベートⅡ／第3回の要領で第二試合を行う。

<手順：ディベートⅢ>

ディベートⅡ①～⑤の流れに従って、ディベートⅢ論題の二試合を行う。

ディベートⅡ・Ⅲ終了後、学生は各々の論題についての改良立論2編を作成することになる。

6. 卒業論文プレゼンテーション

卒業論文は、3年次後期からテーマ探しを始める。そして、3年次の最終課題を、卒業論文テーマ(予定)に沿った15分のプレゼンテーション、それを4,000字以上のレポートとしての提出すること、としている。

4年次4月から、学生は本腰を入れて卒業論文作成に取り掛かることになる。

報告者のゼミでは、卒業論文をゼミ仲間とともに考えて仕上げていく、というやり方をとっている。すなわち、卒業論文作成過程を6段階に分けて、その段階ごとに、各自その内容を発表し、聴き手はそれを批判しながら受け止め、良い点・改善点を指摘する。発表者はそれを肥やしにして、次の段階へ進んでいくのである。

卒業論文作成過程の6段階は、以下のとおりである。

段階Ⅰ……書こうとする論文の流れと、使う資料について

段階Ⅱ……前半部分の一つの話題について

段階Ⅲ……前半部分のまとめ(または、前半もう一つの話題について)

段階4……後半部分の一つの話題について

段階5……卒業論文の中心となる内容について

段階6……卒業論文を完成させて明らかになった点と、論文作成から得た点について

- 1回の授業日に4人が発表する。段階ごとに、発表当番割り当て表をつくる。何かの都合で当番日に発表できなくなった場合は、個人折衝で当番日を誰かに代わってもらう。
- 毎週の「演習II」は、司会の者（前回の発表者の一人、年間を通じて全員が司会役を経験する）が進行役を務める。
- 一人の発表時間は12分、質疑応答時間は8分。一人の発表者に3人以上が質問か意見を言わなくてはならない。時間内に発言できなかった場合、あるいは言い足りなかった場合は、下の様式用の紙「卒業論文相互批評」に記入する。

演習日 月 日 卒業論文相互批評 評者

発表者	良い点・評価できる点	不備な点・改良意見
1		
2		

- 聴き手は全員、4人の発表者のいずれかに質問か意見を述べる。すなわち、全員が発言しなければ、その日の「演習II」は終わらない。
- 教員は、ゼミ員の書いた「良い点・評価できる点」と「不備な点・改良意見」をまとめ、教員自身のコメントも書き入れて、次週のゼミ日に発表者本人渡す。

- 発表者は、その改良意見を参考にしながら卒業論文を書き進めていく。
- 一応文章化しおわった卒業論文は教員に提出する。教員は論展開の不備や文章表現の不備等を指摘して当人に返却する。学生は修正したものを教員に再度提出し、教員は再度点検し、良くない箇所を指摘し、学生はまた修正していく。
- 1月20日を目処に卒業論文を仕上げる。そして、懸賞論文応募要領に従って様式を整え、全員懸賞論文に応募する。

このような経過をたどって、学生たちは各々の卒業論文を仕上げていく。当初、2万字の卒業論文など書けるわけがない、と言っていた学生も、めでたく卒業論文を書き上げる。

おわりに

本学卒業後、報告者のゼミ生たちはそれぞれの職場で働く中で、在学時に「話す」「書く」演習をしてきたことを、その時はしんどかったけど、今思うとあの演習をやってきて良かったと思う、文章を書くことに抵抗がない、と語ってくれている。

ゼミ卒業生のこんな声に背中を押されて、本年度も相変わらず、レポートに赤を入れ、学生に再提出を求めている。

引用文献

生塩睦子・藤本義彦・幾田伸司・穂北晴子・竹林栄治・中嶋則夫・杉山克典・細井謙一編
(2007)『広島経済大学での学び～可能性を広げる表現技法～(改訂版)』広島経済大学
魚住忠久編著 (1997)『ディベート学習の考え方・進め方』黎明書房

*この報告は、本学経済学会2007年度第1回研究集会での発表に加筆したものである。